

第5講：85「子供には重荷」

「おつかれー」今どきの若者は「おはよう」や「こんにちは」よりこの言葉が日常のあいさつになっているようだ。学生が先生に対しても、「お疲れ様です」という表現から会話を始めることも多い。以前、教会本部で参拝をし終えて靴を履く際にも、境内係の人から「お疲れ様でした」と声をかけられた。一瞬「？」と思った。「お疲れ？」「何で？」こちらは神殿で参拝を終え、むしろ元気をいただいている。しかも真冬や灼熱の時期でもなく、気候の良い季節。神殿内の風が心地よく、座りづとめをする私を疲れさせる要素は何もなかった。「別に疲れてないけどなあ。」ふとそんな思いで神殿を後にした。

この「お疲れ様」と同じように「ご苦労様」と言う表現もある。どちらも相手を「ねぎらう」表現だが、相手によって言い方を変える必要があるようだ。「お疲れ様」は誰に対しても使える表現だが、「ご苦労様」は上の立場から下の者に対して使う表現だと言われている。同じことを言うにしても、年齢や立場などによって異なってくるのは日本語の特徴でもある。尊敬語や謙譲語、丁寧語など状況によって表現を変える必要がある。また、小さな男の子に年齢を聞くと「ボクいくつ？」と言ったりもする。相手の立場にたった第1人称の使い方である。日本語は相手の立場を慮^{おもんばか}って使う表現が実に豊かである。

教祖は誰に対しても丁寧に接せられたという。「教祖は、大人だけでなく、いつ、どこの子供にでも、このように丁寧に仰せになった」（逸話 121「いとに着物を」）とある。逸話 85「子供には重荷」では、当時8歳の忠作に「よう、帰って来たなあ。子供には重荷やなあ。」と声をかけ、3升の鏡餅を背負った労をねぎらわれている。相手を慮^{おもんばか}つてのお言葉である。そしてその表現には、これから忠作が背負うであろうさまざまな「重荷」を見越した上での「ねぎらい」の言葉だったのかもしれない。

実際、忠作はさまざまな「重荷」を背負うことになる。

最初の「重荷」は、教祖 30 年祭の本部神殿（現在の北礼拝場）のふしんに関してである。当時、おぢばには全国から巨木が送られてきたが、それを製材する設備がなかった。そこで忠作に、それらの用材を加工する機械をお供えしてもらいたいという話が持ち込まれた。勉強好きだった忠作は元来いろんな発明をしてきたようだが、このときも忠作の弟が経営する鉄工所の工員たちと話し合い、当時としては最新鋭の製材機一式を製造し、本部に献上した。

2つ目の「重荷」は、この製材機の献納が終わって間もなくのこと。これも本部のふしんに関わるもので、要所を締めるかすがいやボルトなど建築に使用される金物を用意してもらいたいというものだった。本来これらは鉄工所で製作するようなものではなかったが、工場と関わっていた企業から買い付けることによっておぢばに献納した。

3つ目の「重荷」は、同じく教祖 30 年祭のふしんの仕上

げとして、本部神殿用の天水桶だった。初代真柱から「用水」の2文字をいただき、鉄工所の協力を得て2基を制作し献納した。

忠作が背負ったこれらの大きな「重荷」以外にも、3日という期日が決められたなかでの上級教会への御用金の準備や、教祖四十年祭の教会倍加運動の時には3日で教会を5カ所設立するということもあった。

これらは、忠作自身が教祖からいただいた「子供には重荷やなあ。」という言葉が素直に受け取り、実行に移したものである。そして言うまでもなく、当事者にとっては決して本来の意味での「重荷」ではなかった。むしろこれらの「重荷」を、親の思いや期待に応える、あるいは応えられる機会、言い換えれば感謝を具現化する好機ととらえ喜び勇んで取り組んできた結果でもある。1つ目の「重荷」をなしたときのことを忠作は「こんな結構な重荷を頂いたのは初めてや。子供の頃、母と教祖にお目にかかった時、『子供には重荷やなあ』と仰せられたが、その1つがこれではないかという気がする」と述懐したという。忠作には最初に教祖と出会ったときにいただいたこのお言葉が、生涯にわたってずっと心に響いていたのに違いない。

大正 12 年（1923）、大阪を拠点とした明城布教所は分教会に昇格し、忠作は初代会長となったが、昭和 4 年（1929）4 月には「荒道開拓」を志し、東京での布教に出発した。忠作 56 歳のことだった。それは「生涯一布教師」の実践であり、教祖からいただいたさらなる「重荷」の実行でもあった。

東京に行った忠作に生活の基盤があったわけではない。「最低限の生活の保障がなければ、勇んで布教はできない。」極貧の幼少時代を過ごした忠作はそう考えていた。そこで生きていくための経済的基盤として、日中は駄菓子屋の卸売りをした。「働いているから布教することはできない」ということも「布教しているから働くことはできない」ということも否定していた。したがって東京では、昼間は商売で精を出し、布教活動は夜に行った。やがて駄菓子屋も布教も軌道に乗り、5年後には分教会の設立にまで至っている。それはまさに、世間のなかで生活を営みつつ布教するこの道の「修行」者たる「里の仙人」という姿であった。

「子供には重荷やなあ。」小さいころにいただいた親からの一言のねぎらいの言葉が、これほどまでに心に響き、苦労を通る原動力になるのだと実感させられる逸話である。参拝をし終えた私に「お疲れ様です」とかけられた境内係の言葉は、これから背負うであろう「重荷」を見越しての親の声だったのかもしれない。否、むしろ逆に、「丈夫な身体にも拘らず、至って惰け者で、他の人がどのように忙しくして居ても、一向に働こうとはせず」にいた作男に対して教祖がかけられた「ご苦労さん。」のように、怠惰な私を見抜いての言葉だったのかもしれない。